

平成16年7月23日
農林水産省 生産局

家畜の改良増殖目標についての研究会（肉用牛）の概要について

下記のとおり、家畜の改良増殖目標についての研究会（肉用牛）が開催されました。

記

1. 日時

平成16年7月21日（水） 13:30～16:30

2. 場所

東京都千代田区霞が関1-2-1
農林水産省本館2階生産局第1会議室

3. 出席者

委員：別紙[PDF]のとおり

4. 議事概要

研究会の座長に向井委員が選出され、事務局より配付資料の説明が行われた後、意見交換が行われました。委員からの主な発言は以下のとおりでした。

消費者に軸足をおいた考え方は評価できる。また、生産現場でも改良目標が合い言葉のように身近なものになる努力をしたい。

畜産業として生産効率・品質を求めると家畜福祉は相反するのではないかと。

褐毛和種及び日本短角種についても目標を設定すべき。

遺伝的多様性と肉質等の斉一性のバランスをどのようにとるのか。

産肉性にバラツキがあり斉一性が必要、とあるが、品種全体で見ればそのとおりであるが、産地毎の特長によって産地が成り立っており、消費者ニーズに見合った多様性の確保が必要である。

将来の方向性として繁殖基盤を強化するというをもっと記述すべき。

安全安心を図る手法については、トレサ法やJAS法によることなど、具体的な手法を明記すべき。

最近の遺伝的不良形質の発現は、近親交配によるというよりも、検査技術の進歩によるところが大きいのではないかと。

国民の理解を得ていくためには、肉の美味しさの観点は重要であり、改良目標を決める視点に取り入れていくべきではないかと。

肥育期間自体を短縮化することについてもっと記述すべき。

交雑種の肥育現場は、肉質向上を求めて肥育期間を延ばす者と経済効率を求めて短くする者と2極化している。一律に肥育期間を短縮する必要はなく、多様なニーズに応じた飼養管理があってもよいのではないかと。

肥育牛の終了時月齢の目標は現実的ではない。肥育期間の短縮ばかりいうと日本の和牛らしさが消えてしまい、外国産との差別化ができなくなってしまう。また、市場では、枝肉重量が少ないと高く売れないことから、枝肉重量の目標値を設定する等、現場の実態にあった目標にして欲しい。

種雄牛の目標値として遺伝的改良量が入ったが、これまでアニマルモデルは県単位

でやってきた。全国レベルで評価したものを目標値として出すと混乱を招く可能性がある。

遺伝的改良量を入れることは賛成だが、理解しにくい。

消費者にわかりやすいという視点からは、種雄牛の目標より肥育牛の目標を先に記述すべき。

種雄牛の能力は産肉能力しか触れていないが、種畜として供用できるかどうかの資質についても記述すべき。一方、雌牛の能力は繁殖性しか触れていないが、産肉能力についても記述すべき。

雌の産肉能力の目標値は、正確度を考えると、現時点では育種価評価により改良目標として掲げるレベルまで達していないのではないか。

現場での雌の選抜・保留に資するため、雌の産肉能力について何らかの指標があるとありがたい。

間接検定成績と実際の市場での脂肪交雑の評価はかい離している。注釈等で何らかの説明が必要。

問い合わせ先

〒100-8950 東京都千代田区霞ヶ関1-2-1

生産局 畜産部 畜産振興課

関村、安松、藤芳

Tel 03-3502-8111 (内線3909、3911、3912)

03-3502-5984 (直通)

Fax 03-3593-7233

「家畜の改良増殖目標についての研究会（肉用牛）」出席委員

（五十音順・敬称略）

伊 藤 弓 全国食肉事業協同組合連合会専務理事

菅 野 成 厚 （社）岩手県畜産協会家畜改良部改良課長

児 玉 一 宏 （社）日本あか牛登録協会事務局長

塩 谷 康 生 （独）農業・生物系特定産業技術研究機構
畜産草地研究所家畜育種繁殖部長

※深 町 啓 次 全国農業協同組合連合会飼料畜産中央研究所
研究開発部養牛グループリーダー

松 永 直 行 農事組合法人松永牧場理事

○向 井 文 雄 国立大学法人神戸大学農学部教授

横 山 政 廣 （独）家畜改良センター鳥取牧場長

吉 村 豊 信 （社）全国和牛登録協会専務理事

渡 邊 大 直 兵庫県農林水産部畜産課主幹

（計 1 0 名）

（○は座長、※関谷委員代理）